

平成19年度事業計画

事業概要

当財団は、創設以来、心の世界に深く関わってきた。今日の我が国は、残念にも精神性を重んじる社会から物質優先の社会へと変化、極端な西洋化によって、自分さえ良ければ良しとするエゴイズムが波及し、我が国が大切にしてきた他国に誇る繊細な心遣いが、すっかり姿を消したのである。

当財団としても、淳風美俗育成事業において、「青少年の家」の指導方針をこの現状に即するように改め、心の教育を刷新することにした。このため、前事業年度において青少年の家指月林の所長を更迭し、後任として、京都府立桂高校を定年退職された吉田荘治校長を招聘した。同氏は、教育界の信認厚く、京都府の教育委員会に務められた経歴もあって、極めて積極的且つ行動的な人物であり当研修所にとって最適の人物と受け止めた。

次いで、学術研究事業においては、前年度よりの継続研究のうち下記の二項を重点的に推進することにした。

- ① 故実再現のための日本茜による染色の研究
- ② インド藍からインジルビン（赤色素）を効果的に採取する方法

I. 学術研究事業

(1) 繊維染色に関する研究

本事業年度における繊維染色学術研究は、新規研究2件、継続研究3件の5項目とした。

- ① 故実再現のための日本茜の研究（継続）
- ② インド藍から、インジルビン及び他の赤紫色系色素のより有効な採取法の検討（継続）
- ③ クルマバアカネの染色性に関する研究（新規）
- ④ インジルビン及び従来から検討中の赤紫色系色素以外の朱鷲色調色素の各種性質の測定並びにインジルビン及び赤紫色系各種色素の有効利用について（新規）
- ⑤ 植物色素の顔料化に関する研究（継続）

上記のうち主なものについて、若干の解説を述べる。

①の研究については、平成16年度より、源氏物語絵巻「柏木二」に見られる宮廷女官衣装の再現を目指し、「古代衣装の染め色に関する研究」の一環として純正日本茜の緋色染めに関する研究を行い、これまでに見本染めを重ねて、予備実験の成果を得てきた。

本年度は、指月林附属染料植物園で植栽している日本茜をいよいよ掘り出しての見本染めの継続実験を行う予定である。

伝統衣装の染色を当時の原料と手法で再現することは、単に色を似せるためだけではなく、自然の恵みを享受して試行錯誤しながら文化を形成した先人達の努力の跡を模索し、原始技法を辿ることになる。また、その過程では現代技術の合理主義を見直すことにも繋がる。今年度は、更に見本染めを継続し、仕上染めに至るプロセスを徹底検証して、天然色素を利用する染色加工の生産性向上に寄与する所存である。

大宮人の経験的染色技術がいかに高度であったか、そしていかにその知恵を現代に甦らせるか、研究成果への期待が高まる場所である。

次に②及び④の研究については、インド藍から合成化学薬品の反応を一切用いず、化学的に純正と思われるインジルビン（インジゴ）を有効かつ能率的に採集する方法を一層深く追求しようとする研究である。従来から研究を重ねてきたが、今年度は更に様々な方法、条件を設定して、より有効な採取方法を試みる所存である。

今一つは、インド藍からインジルビンを取り出す過程で抽出される赤紫色色素以外の色素（無名の色素）に注目する。この無名の色素が抽出液に大量に含有されていることは以前から認識していたが、本研究では、最も美麗で朱鷺色調の色素の有益性に着目し、各種繊維に対する染色性や染色物の各種堅牢度を明らかにすることとした。

③のクルマバアカネの染色性に関する研究では、同植物の栽培に着目、実用化を見据えた研究に着手する所存である。同植物はアカネ科アカネ属の一種であるが、現在は中国地方のごく一部と九州北部の海沿いの地域に自生するのみである。

自生地からして特有の風土や土壌性が必要と推測していたが、意外にも市街地でも比較的容易に栽培できることが判明した。日本茜に似て異（い）なる染色性と新しい染材としての利用に関して将来性が期待できるので、実用化に向けた研究を行う所存である。

（2）附属染料植物園

指月林染料植物園は、かつて平安王朝時代の染料植物である紅花、藍、紫、茜、刈安、黄檗（きはだ）、支子（くちなし）等を網羅し、現在では180種類に及ぶ希少な植物園として、染色家をはじめ、多くの見学者の注目を浴びてきた。しかしながら、

紅花や藍は、一年草であるため良質な種子の確保が難しく、また、紫や茜は土壌や日照に厳重な管理が必要とされ、特に紫草は、夏の暑さに滅法弱く、5年後の収穫期まで育成することが至難であった。

本年度は染料植物園としての原点に立ち返り、これら代表的な染料植物の種子を再度調達し育成に創意工夫を徹底して全力を注ぐ所存である。そして、季節季節に日本古来の染料植物が育成され、希少な染料植物園としてその名を馳せるよう、全職員一丸となって対応する所存である。

Ⅱ．淳風美俗育成事業

本事業年度は、全研修科目に、「日常の挨拶」並びに「礼儀作法」を組み入れ、所長が青少年に直接具体的に指導。夫々の重要性を深く認識せしめた上、体得せしめる計画である。更に、「敬語研修」にも着手し、目上の方々を尊敬する気運を高めたことを願っている次第である。

(1) キャンピング研修

本年度は、青少年が将来りっぱな社会人に成長することを念じ、本キャンピング研修を通じ、人間は一人では生きていけない、互いに支えあってはじめて生きていけるということを体感せしめるため、青少年全員での作業分担の徹底化を図ることにした。なお、近年著しく姿を変えている新型テントについて、設営全般にわたり指導する方針である。

(2) 瞑想研修

青少年が瞑想に集中できるよう道場作りに様々な演出を試みた結果、受講者並びに関係者から非常に高い評価を得た。本年度は、難しい瞑想研修の実を上げるべく道場作りに一層の磨きをかける所存である。

(3) 茶道研修

利休流茶道の根本とも言える和敬清寂の研修は、世界の人々に、日本人の考え方、生き方を理解せしめるに大きな力となるのではないかと考え、本年度は、この教えを中心に、青少年に対する茶道研修を展開することとした。

(4) マナー研修

マナーの基本は挨拶である。前記の如く各研修に夫々挨拶研修を組み入れるが、本マナー研修においては、対照的に世界各国の挨拶を取り上げ、青少年の日本式挨拶に対する認識度を一層深めることに力を注ぐ所存である。

(5) 草木染研修

染料植物園で栽培している身近な染材（栗いが、藍、刈安等）を使用した当研修においては、例年、椿の灰の媒染剤によって初めて鮮やかに発色するという自然の不思議さを受講者に体験せしめ、感動の輪が広がっている。本年度も引き続き意欲的に取り組む所存である。

Ⅲ. 講演会事業

今年度の里仁会講演会は、年1回とし、下記の要領で実施する。

開催月 1月 経済問題

Ⅳ. 寄贈、寄附事業

神社寺院寄附 三宝院 50,000円

(以上)

2007年度
(平成19年度)

事業計画および収支予算書 (案)

自 2007年 4月 1日
至 2008年 3月31日

財団法人 覚 誉 会